武江年表

三

伊地知文庫
文庫20
383
3

伊地知氏書冊

武江年表巻之三

延宝元年癸丑　九月廿一日改元

牛込弘福寺宴剣（寒山該牛　祥師ヨリ）翌年ヨリ毎年遠忌ヲ営ム

○浅草寺○九月十七日坂東九代移葬　七十才

○十月廿二日連光院里村玄祥率○十一月廿六日増上寺大澤滅（谷師常味　ヒヨウ寺ヲ建ルヨシ）

山越福王ノ命ヲ受ル○十一月廿六日増上寺大澤滅（谷師常味　ヒヨウ寺ヲ建ルヨシ）

○十一月廿日庁桐石丹後率（六十九才号宗関石丹流茶ノ元祖　ヨリ宗旦ヲ林房ヨリ茶ヲ学ブ）

○勅ニ帝芝居ヲ大名類（ルイ）（天王　推ヨ）ヲ上ル事禁ズ　狂言ヲ興行ス（元祖ハ十西　十ヒ才ヨリ）

初歩ニ茶ヲ学ブ

始テ蔬ヲ売ルヲ始ム

同二年　甲寅

二月濱茶大円寺十五重再建○二月廿六日夜暁雲斗の雲
あらう為(ためし)に掃(はき)き雪平橋を洗ふ如し
○八月為久保八幡宮内の種芋切売(きりうり)引茶屋(ひきぢやや)を持て
儲る○了翁(りやうおう)新白金(しんしろがね)瑞雲寺(ずいうんじ)を建(たて)藤曲(ふじまが)り生涯一万両を
を収む○西(にし)の丸(まる)炎上(えんしやう)○松尾忠兵衛(まつおちうべえ)今年(ことし)雑鬢(ざつびん)して風雅(ふうが)
深川(ふかがわ)芭蕉(ばしよう)を結ひて住(すま)ひ芭蕉一株を載(うゑ)世人芭蕉庵(ばしようあん)といふ
○十月七日将軍探幽法印(たんゆうほういん)卒　七十三才三田大円寺(さんただいえんじ)に墓碑(ぼひ)あり
法名の内建亜(けんあ)一字(いちじ)なり
○同廿日三宝寺海雲(さんぽうじかいうん)卒　名正(なまさ)の紙出なり
第自性院(だいじしやいん)に葬(ほうむる)
延宝(えんぽう)二年　乙卯　四月閏
嘉天下(かてんか)凱旋(がいせん)金廩(きんりん)を発して織氏(おりうじ)を振給(ふりたまふ)
○二月六日古茶(こちや)の使(つかひ)卒○二月芝金杉(しばかなすぎ)地蔵(じぞう)紀(きの)人(ひと)死(しす)

○空(そら)四月十四日古茶(こちや)の使(つかひ)卒　六十四才(ろくじうよさい)
茶(ちや)の手(てい)久(ひさ)あり
○九月本牧町(ほんもくまち)山村長左衛門(やまむらちやうざえもん)妻(つま)居(をり)て始(はじめ)て男(おとこ)我(わが)強(つよ)き気(きぢ)を興(おこす)
此時(このとき)の名歌(めいか)傷閑(しやうかん)(なげき)の歌(うた)といつて(といつて)梅(うめ)の木(き)に手(て)を懸(かけ)て
嘉(よ)の興(きよう)の不(ふ)狂(きやう)云(いふ)を(を)
男女(だんじよ)変(へん)りて(て)為(なす)狂(きやう)云(いふ)を(を)
きま六年(ろくねん)後(ご)の義狂(ぎきやう)云(いふ)をあらはすなり

同(どう)　己(つちのと)巳(み)年(とし)　丙辰(ひのえたつ)

七月(しちがつ)廿日(はつか)風(かぜ)雷(らい)東(ひがし)洪(こう)○九月(くがつ)駿(すん)沼(しう)藤(とう)地(ち)て家(いへ)十(じう)戸(こ)動(うごく)
強(つよ)風(かぜ)汗(かん)一年(いちねん)春(はる)
押谷(おしやがい)の平(ひら)　冬(ふゆ)芭(ば)号(ごう)繁(はん)昌(しやう)
霊(れい)泉(せん)を(を)
果(くわ)て(て)号(ごう)安(あん)亜(あ)の所(ところ)
指(さし)て(て)
ありて又(また)見(みる)
○九月(くがつ)廿(にじう)二(に)日(ち)夜(よる)新(しん)橋(ばし)宅(たく)失(しつ)火(くわ)
焼(やく)て(て)家(いへ)ありて(て)一(いち)人(にん)を(を)
焼(やく)て(て)
或(あるひ)は(は)
火(くわ)

接て りくの如くしかく（上洛七度の篇のことを略せり）○十一月七日暮六半時吉原江戸町二丁目より火出て西北風烈しく一廓焼亡に及ぶ廓外へ焼かゝて本新中のくるいとりて結る（此時遊女十二人焼死に及ぶ後始て焼る二度ばかりの騒動）仮宅ありて高賑す

○十二月廿六日江府に火災あるゝ和泉屋金蔵宅焼

延宝元年　丁巳　十二月宝

正月八日下谷池のもと横田左衛門右衛門のもとに事を夢ひ寄て雑式

宮鬼子母神を祈せしに其男木村伊右衛門小田町三丁目川村

今日鬼子母神像を感得せし後七所右衛門の妻男子を生せり翌年

此像を本所本佛寺に安置る　○七月中旬より江戸中町々踊

もてあそび流行を禁ぜらる　○八月六日大風雨本橋町其他所々潮入る

○江戸諸板行　七巻　○本朝改元考一冊刊行　蜜加爲編

同六年　戊午

所願上人奥澤村深真寺九品佛開基　○東海道驛路絵図一冊摂州池者来譯　○浮雲妓芸居廃元祀代月市村行を慈伝羅の巷に容

貌も美麗ありしかあるいて無常を悟り菩提の門に入り今年

廿五才依義を尚寛清縁にして西行法師と称る程を志をもとり

ゆくし雑納の日別製して雑煮とり後を脊おひ諸国廻りに

出る後に本所五ツ目自性院を再興し常行念佛を修まて世に

出の恩寺とのこ享保三年不詳　○十月六日狂歌右京時行卒　二十七才

○同月八日吉峯二代目栄率　七十二才

同七年　己未

夏大雨大川溢て生死おゝし

○十一月二日浪人平井権八品川に於て刑せらる　強盗の初る而死罪いまだ但し平舞妓の犯云不幡隆流の長云事を元組て殺りしとて同し時代と云ふ人あり也云湯殿山参詣の人ゆへ殺八よりあるし

○十二月十二日連寺院里村昌通卒　六十五才

延宝八年　庚申　八月室

正月八日茨木春翁卒　茨木坊橘次と号し大阪の産をあつめて源氏を信し辛酉雑考江戸名所図会年表

○二月十日朝五半時なる迄閑夜のゆへ○京周防国

某所江戸名所記○二月築地　西本願寺御堂再建成る　西本願寺今年四月築地に移る

て二月本堂建立あり也或云ふ元禄元年六月築地に移る

あり同ふ云本堂建立るし寛文二年の江戸名所記ふ元禄元年六月築地に移る

周防云今浜大坂町を元町と唱ふ云ふ昔西本願寺横山町二丁目の東側ふ

あり一説橋の元を高ひし家多くあり一説に唱へしとあり

○江戸初日輪寺建立のごとし○五月林春斎春勝卒　六十五才

○六月廿九日能人松江清舟卒　七十四才　俗称大久保長安

立智如林の大佛入仏供養あり　再建

○八月廿八日芝如林寺

浜町霊巌洞鉄砲洲八丁堀海上漂り上て家を損し人溺る者出

橋損し往来止る公命法華寺門跡寺門跡再建

本願寺二箇所に浩波あふまて民家を溺し

○十月晦日酉の刻より坤の方へ廣サ二尺厚長廿四間の石人

自身あり生根の里を長空里とよむ十二月ふ空里より浮出

○技藝拾葉集成　三十三巻

世年間記事

永代橋八幡宮ハ江戸を離まて東方の岸も稀なりし久延寺

のころ往来多く前二三町のうち酒肴菓子を売り服装の女を

也ハ関崎(せきき)の茶屋と号しけるとあり此地も海中へ築出したる湊
なしとぞ遠くハ房総の群山(ぐんざん)近くハ金城芝浦を眺望(てうぼう)し佳景(かけい)の所
にてありしとぞ按るに延宝の江戸図によりて知るべし　此比別当永代寺八幡を祭る
あり今の所と見えし○名乗記二冊刊行　梅次唐琢が撰銭の事を出せる草紙なり
○南畝(なんぽ)先生の仮名世説(かなせせつ)に延宝二年の編玉町(よしまち)の沙汰と云草紙を引
て此ふ塩瀬(しほせ)饅頭(まんぢう)笹粽(ちまき)金龍山の千代がせし米(よね)饅頭浅草本の下
おこし米白山の麦らくちつべくむら焼　ふの焼物して客をうけてくろし延宝元年八月比堺町にてべラバウと名つけし笑人色黒きかたちあさましきを見せものとすなど
八丁堀の松屋せんべい日本橋の一寸箱屋がちりめん
まんぢう糀町の助三(すけさう)ふのやき本町の[illegible]橋のちくらの二官船大松(おほまつ)
大阪屋の源五兵衛糸屋　在色業子してまろし　云々南畝先生云延宝の比の江戸の
名物なるべし見せりと云々　夜ふけ出る茶屋や八宝町一丁目にして其家の看板に焼の本偶今ふ掛りて商家の軒の上にあり

○強盗(がうがんど)と号し小さき蝋燭(らうそく)を作りける　浅草山谷紙漉の始め　むかしある盗賊のやうなるを作るといへる
らうそくやをして始めしむ○此頃俳諧に江戸談林(だんりん)風といふ口調(くてう)の田代松意一正友等
より起りて盛に行れ又茶句付といふ事始りて行れ元禄八九年の
ころ又行れたり○堺町に近江の国浅井よりよくよく大女　身のたけ七尺二寸
又南京(なんきん)といふ小男を見せ物とせり　周栓某小男
○江戸絵図ハ延宝の図をもて委しと見え高輪深川を加へたるハ
寛文延宝の頃より始りしなるべし　延宝八年梓行せる西の内摺大本紙巻の江戸図二巻あり浅草橋通り瓦町表紙屋市兵衛板とあり元江戸ムラの図ハ寛永年間に委しくあり児玉寿昌が補益が紙屋市兵衛板とありて寛文の比より寛永のころまでの板ありて一分十間ニ一分十五間一分に十間のものあるよし図中不見せり
延宝の江戸図に今と替りたるをいささか左に誌す
佐久間町　今の神田佐久間町　新道通丁　今天神の下　村松町　今の[illegible]　新石町二丁目

今の東の
新石町と
二本榎 昔は逆さ
ふもあり
嵐宛 新田の
意下
新小田原町 三河町の
佐藤あり
こんぶく町 新田
まさご
丁の内
ちんきの河岸 一ツ橋より
神田橋外を
おけ橋 今のさくぎ
新橋
戸越橋 岸丁より八丁堀へ
渡る今深川橋
三ツ股橋 今云ふ三橋と天和に年の
常盤橋えちう橋とあり
久右衛門町 向柳原新今の芝
浜松町四丁目古名
法恵寺 上野寺院
門外入口
清水稲荷
社あり
ちくぶ丁の跡 日比谷あり
ちく記せり
本願山入口より外天神堀門内より池より
流て本郷辺あり 池の端通 法地あり 新田やう 上の門内の西側に
西こすき町 法華西原
丁目例
今の新田稲荷町 倉澤町 色二四丁目和田蔵
邸あり
まさご丁八丁堀今の湯島横町の
今の四ツ目通りの
一ツ橋まさご町家とありて今深川町といふかの
本郷あり一西西ちとちとつるあるべし
今の昌平橋を仮橋とある
今の英町の西本多肥州侯藩
侯広藩邸あり
女郎橋 際今の同朋町
新地の西極本源とあり
新古柳橋 まさご橋 まさご西の方なをべて矢の広場今あさけ九

清水船の本所広敷前の通りとり東のうこ横堀あり 今の茅場橋
ゟ元茅原の橋とあり 女郎橋南の方川中ゟ唐船と記して一艘の大
船を西り 考 田向院山門あり 吉原ゟけんどん町あり 吉原南の通りこ
とあり 星霜の称
呼考べし 八丁堀ゟ流引て武家屋敷のこと 本所法恵寺 一本ゟけんどん河岸
一本ゟ新地 鉄砲洲十郎町
小伝馬町江戸町志水町ゟ上町 そうきも 寺の東あり 羽黒殿橋 今の浅草
橋あり 白金
橋 雪ゟ流内ゟ蓮葉の形しるあり
あり 芝井町先流ゟ多ゟ残存あり 赤坂氷川社根津権現社とも
同地ゟあり 吉羽町 色田 田園なり 亀戸天満宮同綾瀬 深川ゟ
江戸ゟ東丁後方ゟ丁後方ゟ町新辺東丁作方東丁生あり 新井
亀の御茶新中 長広郎あり 永代橋八幡宮海ゟ 永代橋ゟ対せり
吳服ゟ流ゟ出ゟ入海ゟて永代橋ゟ海ゟ

天和元年　辛酉　九月廿五日改元

二月高田屋復営家剣（上永田八幡社高麗屋敷ヲ仮相法下　長興家基　五月院家と成る）

○浅草門廣ゐる○法恩院（法花宗ヲ院法号）○十一月廿八日九山本妙寺

○日蓮上人二百年忌（元禄元年毎年ノ如シ）○日蓮上人二百年忌

ゆゑ大事の勅使焼亡○十二月廿八日川田ヶ窪ゆゑ大火して四ツ谷

赤坂麻布三田芝牛町ヲ焼る○今年武国橋ハ撤去あり矣の

金南服ゆゑ事新一ツ目の橋際へ渡る仮橋を設く今之を元橋と

ゆゑ千五年の後元禄九年ヲ今の西へ移営あり

同二年　壬戌

二月六日市谷ヲ焼ル○優女山天龍寺新火ヲ遂焼年に若く

稼ぎる○二月廿八日御人為山宗周江戸ヲ発ス（七十八才）

○三月御人石田来孫率（来源の男ゆゑ）○四月琉球人来聘（正役久護五子

○四月十七日明の朱舜水先生弱逝ヲ年（年八十二）常州久慈郡瑞竜山ヲ

葬ス○四月廿九日将軍家綱（二十才　徳川氏女）

○七月湯殿ヲ順庵　号ゆゑ

○七月二日大雲院千隆西隆（落合義雲寺山白義久義

禅師寂ス○七月浅草人浄瑠璃語の新天下一の号を得ゆゑ

○同月屋形船の寸法定あり○八月朝鮮人来聘（正使尹趾寛副使李

発編後事朴芝後

来聘ゆゑ後改ス）○九月安宅九郎御船を解ひゆゑ

○九月ヲ嶺湯殿来歌山内ヲ地をのそゆゑ学察を遂ル恐中

為ゆゑ経を誦ス経を遂ル○青山横ヲ来長福寺ヲ古洞

佛河泉絶像を安置ス（寛平二年　明ゆゑ）菅来ヲ彩色の内ヲ有りしを大坂

城中へ移されしが落城の後江戸へ持来り今村氏が八丁堀の屋
敷にありしを常光寺住職意翁和尚に納して今年九月送る所なりとぞ
○十一月晦日戸田茂睡が男浮竜卒す墓所浅草金龍寺に在
此子を失ひ向井の云辞世の詩茂睡が追悼の哥人の知る所也へのせたり
○十二月廿八日未下刻駒込大円寺より出火
本郷上野下谷池の端筋違御門神田の辺日本橋まで浅草御蔵
同所つゞける蛤町辺迄の法恩寺両国橋焼落本所深川に至る数千
の家焼失す
此火事に遇ひて財宝を失ひたるもの或は焼死溺死の人夥しく天和の大火と云
人多く火を避けて悲涙の声を哀憐して学寮の乃翁綴旅日年来の修学に
焼失す書籍の類一千二百未の焼を分見人に施せりこの時江のをさく仟丁勧学屋の市店土蔵
に火入て多年求め置ける内外の書籍一万巻余焼失とありしとぞ深川の芭蕉
庵も火にかゝりて翁も潮にひたり
烟中をのがれしといふも此時の事なるべし
此火事の後本所士民の家を拂せられ
元の田圃と成る　○湯島本町屋を払せられ桜馬場となる

天和三年　癸亥　五月望

正月元日大雨洪水　○正月車長持を禁せらる　火災の時障碍の妨となる由なり
○二月六日市谷出火　○二月十六日牛込出火
○武者小路実蔭公江戸下向　孫生晦日発を立給ふとぞ
あさくさ八景の詠来ハ志らく禄として家も数ヶありて見ゆる
○本郷筋違小路に成る　○二月廿九日駒込片町八百屋久兵衛の娘
お七火刑に処せらる　今年十六才とかや是頭来世人の知る所あり十二才の春松竹梅の
二字を出さる横穴を出しまの行跡を傷るなりこの
お七か谷中七面宮のまへにして子ある由へるを名つけしとし之讀芸ハ駒込安栄寺
あり今世哥舞伎の狂言再建する所なり外にお七の墓は浦和郡江戸谷中蔵前の祖師堂あり
けるを霊鷲山法華宗円乗寺に云家八百屋娘お七十一才の墓海之定宝在年
辰ま三月と出宿し又同寺にお七火刑ハ天和二年三月とあり此せう八根あり
○夏江戸大旱久　○六月六日玄蕃本円卒
基あり耳底池ハ上山を揺としよ　武蔵一葉居士といひ諸寺ハよ
人の知士ふて法勇の人あり　家来の本円あり駒込海蔵寺ふ
○雲光院本堂火法綿する深勧する寺る玄年
の炎後本所田の辺より深川へ移る蛤町の北ふあり　新行寺駒込へ

うつる○十二月五日江戸焼（合考不詳 方角未詳）○りゝ作森内清操行（森蘭丸元の祝鳥丸）
光廣の作也と云正保年中安の比の編之一也今年正行せるなり○紫の一本写本成（戸田茂睡作）

弘安年間紀事

安宅丸の御船を解せられし時安宅丸河岸まであり〳〵れ船岸を被
大船を出すべし〳〵川の東岸の地へ移させ〳〵る
○大屋形船を浮〳〵る東西九（東西橋 大船始之）非田市丸（非田一の大船）熊一丸（東西九尋 巾一尋）
山市丸（日本橋の船之発者 八尋巾一尋内之）分て大船あり〳〵腰掛船の名家の一本江戸
船を拾遺せずあり（事跡合考云天和の比小山田江市市といふ人の俗語を作り
奪ひ元禄八人を也敷〳〵けるる是八町りごを張まこ夜八川岸月
町空蔵を止ぬふ町りごを元禄中也発あり〳〵りと戸を樂〳〵也〳〵と）
○俠客源見十左衛遠流（遠流後十八年を経て宝永中恩赦を許さる）
○千川上水出来るハ延宝天和の比なり〳〵板橋の西の方練馬の南

のうさゝ非の池の方より本所流末及び柳原筋ふ引本〳〵ま〳〵ゝ
流を千川上水と以ふ享保七年ゆり止めふ又同〳〵流年元の内（後藤）
川の分流を業平橋筋ふ引さく又年元中ふ掛〳〵ゝを白堀上水
といふ是も享保中作〳〵る〳〵上水の川筋今も業平橋の東北の方
の橋際より菊屋敷世話村の方へ通りて小川一流あり是別名を白
堀上水の筋なり（川上事跡合考ふ）
○非田永宝町の地ハ作竹家皆川町ハ対馬家屋敷なりしゝ
天和中作竹家ハ下谷〳〵引けて牛込町屋敷なり永宝町と云対馬
家ハ松平下総屋敷屋敷なりしゝ後宝永の比町屋敷なり皆川
町といふ松下町代地の不也元禄比まてハ太田摂州屋敷屋敷
中記あてあり〳〵なり○大の比土作節浄瑠璃流行也

○天和中浅草寺経蔵(きやうざう)へ商人の荷物を入置し處より失火して
焼亡し後再興ありしと云

○紫の一本(ひともと)に日本橋一丁目塩瀬隣に瀬戸物町の西の方八助茶屋より
ちりまりける池のちさきのねん安黄蘗様本家の場の黄蘗様芝の
陳三官唐飴飯田町の妻屋に温飩云々とあり此時代のことなり故に

へし○此頃まで唄比丘尼(うたびくに)の内神田あつさ町(多町あり)よりいづる永
玄永姫おまん川竹節といふ名より出てありしとぞ其頃まで羽二(えふさ)
重の揚帽子(あげぼうし)をかぶる事なりて之を鏥子鬢(すずびん)と名つけたり又
宝永の頃までありし縒橋(さきつこ)といひしも土妓にてありし

○此時代に象潟(きさかた)霊山(さん)を書行る　一本に村氏といひ霊山は肥後熊本の産にして元禄(ゑんろく)二三年と号し加藤家の侍医なり加藤家の断絶に依て細川家に仕へ字は文三三益と号す又細川家に仕へ生父三益を学び文章にのこし長崎に滞し一年人に命し霊山も初より学びて文章ありし一年人より擬徒法を得て能筆

の父元あり黄檗隠元師の出現独立と云ふ方外の友として共に出の事ハ不同
じくありし或ときは独立曰いかにといふ不審など書ても筆力精神霊山に及ざればいかにといふ不審あり
独立あり彼ハ三ヶ月あり二三日して終に滑稽しけるとあり霊山江戸に来り黄檗の僧
と同伴して東山洛陽に来る後室町深世に移り偶居し晩年延宝年中にある
へし門人五六人あり廣沢も一生二人とくらしくハ二老男侍にあり
二老とハ霊山廣沢の二老なり文を世時人侍にもいきてその侍を為すより

○池乃端錦袋圓(きんたいゑん)行る　勧学院の了翁僧都は羽州の産なり幼くして仏学に入し一代蔵経を寄附せんことを発願し難行を修しけるに寛文
二年にあり去年に大燃を焼せし一指痛みにたへしかるに夢中に妙薬の奥旨を授りて上野山如
定禅師より薬法を授り終に千金を得て諸の蔵の内より名号して授くるに此
とて錦袋圓と号し後東叡山の麓に表七間裏行廿二間の市店をひらき此薬を
ひさぎて志願の料に充つ薬非効ありてこれを求むるに如何なるに随て江戸の人日ごとに五十人余
にても似せ薬を調合して売りけるを後人といひしを了翁承り是を憐て
を養ひ市中を能く細して売らしむる或人これを了翁に告て云似せ薬を売人八百下
の薬ハ行く廣るへし若廣らハ大利ならんと謂しかば其薬夫
利の本ことハ法人を助け救ふ為なり若此薬売て妻子の後はちともあらハ
本意の一つありと或人又曰若彼が薬人に出来ありハまた料ハ三百不に落ちへし言曰
日月ハ未此に落て天下に行きと同然数回にして五年に大衆してありしとぞ

貞享元年　甲子　二月廿一日改元

正月晦日彼岸令(ふくきでう)改定○元三大師七百年忌

○知足院を湯島へ移し　番地八神田の東にあり

○弘法大師八百五十年忌　○正月廿日古筆二代了祐卒　七十才

○東福寺七仏薬師ヲ谷ちう麻布　某寺を板

○九月廿二日官医昌安玄琳卒　麻布祥雲寺ヲ葬す　○九月大風家屋を吹倒す　○十二月園基師保井算哲天文職ヲ辞　昌安算哲ハ天文家　妻く改暦の事

多を刊り貞享唐七巻貞享唐法通書五巻を編述せり

○甲子江戸暦利行　松倉嘉右衛門　板行の始といふ

○来世改暦領行　但宣明暦を改めしなり

貞享二年　乙丑

二月廿二日流星東南ヨリ西北ニ光数百里を照し暫く有て空ヲ雷の如し　○真言田舎暦観音開帳　浅井了意　この時東叡山

○五月伊勢子福昌寺東師如来開帳　このとき十二神将

を除して　山縁あるこの記事を三田の山縁ものとなきよう入れ　もせど

の像あるこ

ふ遠ニなる　○日暮里流行社造営　○六月浅草寺智東院別当

を正教寺と東叡山御兼帯と成る　○九月廿日将軍東安行軍

七十三才　○十二月霊山ヨリ再檀林と成る　以前浅草にあり元禄

元年ふ本所へうつる

○同　三年　丙寅　二月ヨ

正月一日古筆了世ヨリ周庵　○国二月利根川西を武蔵とし

東を下総と定め　菩提寺二ケ所ふ多ル　東禅寺ヨリ浅草川ヲ西の地い

武蔵ヨリ下総ヲ中古下総ふ属せり今年　菩提寺西福寺西原ヲ上代

苔のごとく武蔵ヨリ属せしめ　○正月服忌令出ル　元禄元年六月尚遠

同七年四月　加又同七年九月追加

出ル　○九月品川御殿成　○九月小石川白山権現祭礼始

ヲ本所ヨリ通りを浅草　○九月大小神輿　どうやうぎ

罪科ふ処せらる　神輿迴ると賞を法と称して三社安産

陽峯ふ仁ふ処とする八月寄あり

同　四年　丁卯

三月十八日より浅草寺観世音開帳○同寺二王門外令弼観世音
像遷立　頼母上総介邸内に祭る邸内に樂那破林寺の跡なり
○江戸無宿子七冊捧行　他者坂田氏
○七月廿二日より廿六日迄本所前田邸にて家光公勅進能興行
○女国別蒙国棄扶　此時代の風俗
正伝女貞享元年丁卯十二月十二日とあり　是慶長年間浜町小伯耆守殿屋敷の娘より
と言ふ説あり　父母不孝あり後に改編
ある村田伊左衛門といふ者不孝にして貞操あり母幸ふして孝養尽くす父母再婚の少
年近くして頻に母に対ひて食を減じ日を経て遂に病死す　夫婦食を断ちて後
子府　記事江戸名所の事の後まで松の操の名高くせし　風俗整ふ比なり
その貞操云ふべきなり　三田円実寺二ケ寺あり　実相寺麻布宝塔寺
のなり
あり

此年間記事

貞享元禄の江戸より記各所屋敷屋敷追々ふやさる

○貞享中流行あり六々橋流る夫より撫る事あり　武
蔵志料ふ中右田中丘陵宿澤の名あり　紀伊国屋文左衛門
以つて　同中云中右江戸の三大橋六々橋ふ中の橋を
いひしより元禄の江戸老人のおもかげありとあり
○弱近光源寺大観音造立　江戸の町人九郎右衛門寄進之　時弥田の
町屋敷を求て造る寺寄附　○千解通　江戸より始る大門通り行屋敷云湯
一今ふ番屋の料ふ死つ
といふものの立支ふて出来しとい
○小頃河村隨見南新堀を丁目へ移る　浜町八丁角より昊蔵島迄十二条
川岸まで武家の屋敷ふ近代ふ変ふ土ふ小芝を付け表門南新川と表門ふ浜町屋敷ふ小家く
居宅瓦葺土蔵造あり　明屋敷後町屋敷瓦葺出張止ふ　隨見ふ年紀計り
公儀ふ出あり　隨見ふ浜ふ小田をひしひしと見ふ年紀計り
見りしふ切ふ江戸繁中形ふ云ふ
○貞享の江より大森村の辺まで海苔を製江　百姓さま形地をかちしと云
○ふの時代の江戸図浅草花川戸を松川戸とあり

○好古日録云　婦女の善く用る箏八貞享年号御厨子所所役
後藤[illegible]て工人不[illegible]
まりしとあり

元禄元年　戊辰　九月晦日改元

当年春所の地元の如く武士町屋をうつされ昌の地家
以前より年の西隅にうつる元年庚辰年西より
[illegible]の板の出来る云々吉川氏のおとりて業とす
○九月祢田明祢宗祇祢襄練物始　御城内へ入る
○十月二日儒師西山健甫卒　公次兼扱本養玄院本葬
○十月十八日連奇師星村昌程卒　○十一月祢田橘御門外知足院
を移さるる御物所となりて亥年より改て施設山護持院元禄
寺と号す　[illegible]

同二年　己巳　正月定

正月十二日儒師今井弘斎卒　号魯斎本[illegible]
○正月十六日改日老人墨現況　老人墨人名[illegible]の瑞あり活年
○五月十六日雨天三十二間堂あて御達家の居福井流奥州矢[illegible]五
千三百六十を射て江戸の天下一と称る
○十月婚姻の時の為あひせ御制禁あり
○十月廿五日夜異星墨現の方ふある○十二月小村雪岱翁英男
湖書記　呂本学方の婚あり同七年法印ふ叙す
○江戸圖絵惣目板行　画工石川流宣後之編墨一枚本一冊　○再訂江戸惣廉の板七冊　松月堂日角編

同三年　庚午

二月鬼門御右左馬の町より汐崎まて大工町より元材木町まて

廣徹しかる長崎町の廣徹を廢
長崎丁の西廣小路（今新浜町と
橋丁の名ありしを西は大工町とあり）
海藻地海を不屋宅を建しめらる
此所の時のなりしとそ
○同十五日西丸池を蓮の葉為不空上人等日念佛會海藻
辯集し十念を文字書の名号をもつ事歟
○五月芝増上寺
今天王寺
丈六佛建立新立来詳
○十月浅草寺に別当伝法院と成○鶯宴文集成
百廿卷
○十二月十七日金龍山横谷宗珍等○東海道分間延絵棒引
寺を及下機
菱川師宣畫
この絵の板を
昌平坂と改る
○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟
是まで無之所なり今年この西へうつしなり
元祿巳年　辛未　八月室
正月湯島聖大聖殿御普請成る
上野とうりうる式地是まで八林家の持あて
弘法寺あり〜〜式変化不十倍の

弘法を設くるを七十二賢等先儒の後に配享狩野洞雲是を画く二月小市延夜あり
同十一月家奥あり老を浅町八代將軍の地度ゆりしを今の西代地をあらてはること
あり
昌平橋
古名一口橋
昌平橋と改る
二月なり

頌大成殿新落　芝山

登〻昌平坂峩〻士山東斯度斯經始倏忽成廟宮楸功
依勝地莊觀聳清穹壽棟龍輪奐鱗甍真玲瓏四配玉床
下雍容珠箔中三才抵太極六經定折衷禮樂孚雅飾文
教克磨礱山知仁有樂川耿道罔窮時否欲浮海栖〻帰
魯門豊祀誠如在吉蠲捧芳樽神明永降監國祚齊乾坤
春入舞雩節化雨澤黎元
○同月麻疹流行○同九日鄙人一押折不卜卒
六西法恵寺住職
○同十日鄙人鴨田喜云卒
六十三才
○同月碑文谷法花寺開堂
布谷自性院法花宗無田派をあらためあ天台宗となる七月日蓮宗

然田派の俳師亘流く流さる○今川橋より小川始て掛割る
○六月十八日紀州根来寺山賞獲上人来年五百五十年忌奥義
大師と諡号をあふ○七月官医半井ト養罪あつて伊豆へ宅
流く流さる○八月湯島霊雲寺遠忌あり　年山浄岳和尚
○十一月十九日茶人清水勧閑年　号瀑紙菴牛斎　江戸の茶祖
○芝浦高野寺上人勅紀して造る所の金羽立像の六地蔵を寺
眼ありて江戸六部ふる川　る院号来源記寺
都築年死す
○俳優名木辰ゑ助後踊所飛行する　五元集　辰ゑ助ハ中村
すき　踊人今まで踊　生角
○骨董集ハ文稼六年ハ年大流行　花
逸ゑ元稼ハ年寂せ　しとあるを濱井ハ美年と云ふ
ハ此時代ハ亮しハ入三人あり濱井ハ多信人今年人のハ
去ありしとあんこふハ八幡きのりまあ濱さまと大ことあるを見ハ少も
信の方あるべし　折ふ翁伝記あ
泉ハのんとあるもて同ふ
ありしあるこそあるあけを

元禄五年　壬申

正月元日未申の時日蝕七分半○浅草観音堂造営
○大塚護国寺法堂棟立○六月五日より伊勢花菖蒲
如来図回院ハて寄附　本田菖蒲文殊ハ長三人の像
武家寄附ハ分江戸ハてつくる
●八月清菓子司大久保氏忠宣父母と俱ハ孫命ハ扇
菖蒲の境内ハく五寸ばかりありける郡ハの藤をとりて
牛酒長命ハ来載ふりしの沒年ハ来ハて三文服ハ及ふ
の今ハ来りても彩濃ありの
○九月濃茶川流防町ふり聖天町まて敷せ禁彫の高札を
建ふる

同　六年　癸酉

素飛乃後ゆき法然上人自作像ほり出て寄進ス 東洋

○二月信濃国善光寺如来開帳 名号福称金牟 約廿五年に当る不詳

世上小疫病行る事を告るとの妖云一般の噂とありてこれを除く世法の書物を梓行せしかば世人云を言ふふせ者

ともを制せらるゝ 安元

○五月霜降町を小川町小石川濱元町を家坂町と改る

○六月廿八日御鉄砲の南三圓社を小石川の句を吟ず 奇事雑考不審一説乃記を引て云く天下異類ありて田面の名を一生涯の句を作り須臾にして去ることなり 生涯社牛付くてあり

○七月彰大橋流 安政五年の冬深川大橋を大橋といふ安政の頃彰大橋といふ 橋の上芭蕉同じく橋流りし附 ○八月廿九日の南方文殊寺東吹寺 二寺板上行 あるくあいさひて踏橋の霊日 辞逆の訪あて一説千塚も本の墓も為墓なり 生角 寺不詳

元禄七年 甲戌 五月定

○六月八日狩野洞雲益信寺 上野護国院不詳 ○二月廿九日小川寺脇寺焼失 安政再建あり ○六月湯島霊雲寺実八幡真言律の寺ほろぶる

○六月廿六日杉山検校伝一寂 八十余才 孫勤寺不詳 ○七月浅草大護院不詳 ○八幡宮を勧請せしめらる 一説に元禄又年とも云 ○七月浅草大護院不詳 ○八月二日小塚改尹寺 七十才号蓮雲祝髪十而寺廃次男也 第四代不久寺 深川浄名寺不詳 ○深川宜雲寺剣 世云一塔寺あり ○高田穴八幡宮社地に水家明神を勧請す ○浅草名所活板行七巻

○湯上る世二世貞蓋上人大伽正法足とり代く大伽正なり

○十月七日奥澤村浄土宗寺墓所頂上人寂 七十七才

○十月十二日芭蕉翁浪花ニ寂ス○十一月十五日寺人山名宗山卒 名武豊 市谷谷丁慈照院ニ葬ル ○同十六日吉川惟足翁卒 七十九才

○十一月狩倉原大門口ニ宮札を建ル

元禄八年 乙亥

二月八日東刻大風江谷往来町ヨリ出火其札の辻海辺まで焼亡

○三月儒師谷一友卒 名松号己千源氏 長谷寺ニ葬ル ○柳原押表稲荷の假宮焼

内裏未成就 ○五月宮医余淀吉啓卒 八十才 弱冠ニ葬ル

○五月英雄院元師ニ国師号を追贈しぬ

○七月護国寺山門正面ニ仮ニ八月朔日東所殿源ヲ入佛供養あり 五百羅漢像を排列ス是松雲源師自ら勧化して刻まる而して法華経八大々々英雄山の拝刻あり

○九月明の人張孫師寂 水戸藩家臣ニ儒師宿屋のちあり

○金銀を吹出さる九月ヨリ通用ヲ止まる 元禄金銀元字入金銀と いまだ出そこまを改く

○十月中狩ニ大小屋を建ル○十月十六日東叡山二世公海僧正迁化 寿八十九 ○十二月報寺屋揚辺より出火新揚まで焼亡

同九年 丙子

新代揚始て開る 百ヶ所遊女揚の内ニ新揚と云ふ所あり新浪しまの内ニ元禄二年の頃大浪しと云ふ所あり其後新代揚始て開 及黄金の幸揚を新代揚と云ふ所ニ新代揚始て開 ア丶所ニ代揚を云ふ 大子より八の月 源氏 ○正月十二日宮儒人貝友元祝ス市場ニ卒 名節 号竹洞

○二月牧野長門守家法禮を鑄せ始めて銀源ヲ納る

○五月廿二日上狩中堂ヶ谷ニ出る蒙師如来ニ及志賀郡円山寺より

迁ス廿三日同廿七日十二神日光月光像ヲ羽黒山形立石ヨリ

移ス○金銀流行を定る

○六月十九日大地震○十一月十六日東叡山中凌雲院ニ慈源僧正

迂化 訓点法華経法華経多く上梓せらるるを世ふ為滅度年といふ

○十二月十二日水府侯儒臣平野重葉卒 公年表家系ニハ平野重葉を碑文ニハ年山紀伊ノ子ノ有

元禄十年 丁丑 二月至

五元集拾遺 大小の吟

大雅を考ふ 四六 八九 十一 十二 裏 帰花 この花ふ 七角

○正月十九日北村湖春卒 年廿余才

五元集 湖春をいとみて

浪くよむ絵冊もあり花と 爰 七角

○正月法鏡上人小圓光大師の遺号を賜ふ○毛利村にて羽織を焼さしめる

○十谷五象天祢今の所ふ建 昌住の宅地ニ 首ハ上州小五郎ノ公ニ仕ヘ瀬川陸奥ノ家ニ仕ヘ数助ふ落度あり一ヶ月ノ内ニ今年捨ラレモ閉門

○酒運上法定○五月八日より新大橋ふ於て家中ふ新しき恩

勅進能興行あり 家中ノ士ノ助ケを勤ム ○六月部屋金通用始る

○同月磨同瓦十一人ふ宮ふる○七月より復古する観音堂護持院

大日堂法隆寺○九月毛利戸天満宮祢ヲの法式白川吉田ふ復ス

右寧府の例ふ准ずべし有 勅許を蒙る

○十月十七日大坂上の町より出火ありて小日向牛込田安内ふ及ぶ町

まで焼ケ

仮田町世継稲荷の社牛込漬沖の落ちしより吳服橋ふ移ス 町屋ト成神ヲ移ス

あて明ル年建立ス 建立ノ日ハ宮ノ社ハ宮ノ下ハ坂の下ハ坂ノ下ハ仮田町ト名ヲ付ケ

同十一年 戊寅

正月十二日再人桃田柳栄卒 名守光号幽香翁 池上本門寺ふ葬

○二月川村随見 石巻ヲ漆稼をあるる天和二壬戌年 教樹ふ入貝 宝甲子年ふ

大坂川くに普請を命せらるる功成江戸ふ帰りて年号を改む

安治川も出水流れ来り○五月小石川御殿造営
○六月九日医師板垣宇燈卒（歳五十合誘ち五十歳）○七月伊豆師園井碧菴卒（名義号東皐　字伯東稚号碧菴）○七月深川海辺一万坪を築立る（海防と号）
○七月廿三日三田新堀白金御殿まて堀しめらる
○八月彩日永代橋今日より渡来御る
○八月東叡山根本中堂文殊楼二王門并山王社（今の西へ移さる）御遷立
廿八日中堂入佛あり（九月三日仮堂五日より諸人参詣を願さる御殿の芝縄一時ハ福禄一山門前を立るの地もあり）
町奉行ひ〻記度小路とせ〻まーもこの時なり平田町八彩町京彩町車坂町
のうち茶ハ柳町黒門町ハ元拂せ〻まを平田と為の渡へ代地をぬそる

南郭文集　東叡山瑠璃殿

一且経営結構新〻入門何處避紅塵　玉樓金殿高多少
不庇貧民七尺身

○九月六日増殿の勅願別当あり（式勅願へ持仏院基仏ハ書ひし仏和尚
畳りて七三重の株を作本を分て造り株ハ川茶中巻の堅横の丈尺おーも遠ひ
減して狭くくのひいるを清書して　敷質ハ御入筆あり仏殿ハ刻一漆塗箔を施
金具を組て紫宸殿の様ハ倣て丈ハ実寸へ下ゆすこと
○同日已刻ハ彩橋南鴻町より出火南風烈〻しく大名ハ落通町筋
彩田下谷ノ野沼平塚流茶山谷千住掃部宿ハ元三里ハ焼流茶
廿三日ハ巻焼あて元禄十巳年ハ焼り深川ハ延数寺度河岸繰り
河岸八るの道筋十五ると流る○三浦屋彩社板ハ本あり〻ら東叡
山中堂ハ本深流茶田京町へ移る○十二月十日本石町弐丁目より
ハ火日本橋霊巌寺八丁堀鉄炮洲佃島まて焼る日本橋焼流て
人多く死ス○十二月西ハ大変潮水漏せ〻る（巳十六年ハ板町二丁目
彩ハ本石一ハ出あり）
○十二月廿二日伊師本下ハ居卒（名貞幹称平三郎　千束村ハ葬る）

元禄十二年　己卯　九月改

去国横山町横矢の法華堂去年災後今年二月西門跡の東南に移
堂に移さるゝ汐風あて古来朽ふるゆゑ也（享保の始沢流寺出来）
一説に移さるゝ　横矢の出来の時八町庭廣小路と有り大なる小道沢町と成と云
出来中記と記り別矢の出来あるべし此横矢の出来の記に地蔵の堂に八
但丁殺も有しとあり久勝志に八ツの出来とあり一説八の出来とのべり
武蔵志料に云柳橋八柳原の東に当り世に呼柳橋と云ふ俗に是に昔渡あり故
の南茶屋坂ふくまる橋を元柳橋と云ふ尉して云ふ所なり此橋は敵渡
橋と云ふ此西八にあるべく故に橋この所に有しと今に矢の廣と云
西に廣小路あり昔八廣小路の南の方に大溝あり是昔の矢の廣の名残歟
元禄の古図に見えたり此渡矢の廣を引まてその跡に鵜氏の居宅とある
故に今ふるきりて其鵜氏の支流歟に成ふ故に立廣の
別庭とあるきり其鵜氏の支流歟に成ふ故に立廣の
後明らかなき所なれとも今所の名に残れり
○二月社天和尚出寂大巌寺に焼亡
筋違内まて焼亡○同月同日夜の小南千年忌法事

○八月十九日大風○九月六日川村隨見寂（同年天誅ある　年表也）

同十三年　庚辰

二月下谷車坂より出火浅草辺出来西まで焼亡
○後国ちゆて城州淀清流寺の釋迦如来開帳（同廿七日下向あり中
一説に八月のころ有り此年当国の開帳ホ一年後
開帳無数一説に八十日のころ有り此年当国の開帳ホ一年後
○永代橋築地六万坪成○八月十七日より葛西飯塚村久良観世音
出現より二年三年同所にて開帳○深川佐賀町今川町の辺ホ
材木問屋六万坪ホ地をのハりて引移る今の本所あり
○水戸屋敷小村井村長右衛門芝居屋七変化の面能をもよ
同十四年　辛巳
正月元日癸辰朔日蝕八分○或記云元代橋の辺ホ大河内何某殿

出屋敷あり〜ら今年正月元日玄冥〜何の孔とも知ぬ女の首級あり人〜驚るしゐ果首ゐ人の所生淵ゐ年武門の祥瑞あり
とて是をまつり鬼宮地神ゐ崇ふむ世人選ておりん るさぬとひるる後ゐ何のゆ遊女る
尾の社ありと云ふ〜しゐり今も祀代橋の側ゐ小祠ゐり
○二月十九日吉第五代ゐ祇率ゐ 享年七才 ○二月天波宮八百年
法ゐ乗年お勇ゐ付〜堂戸社ゐ於て淫祭連俳興行あり
又元集 生涯の句 松樹やあるむる年も八百ゐ ○三月京真如堂左蓬左子江戸ゐく
寂照 寂照法師 ○三月十日浅草家吉良家事あり一日之世人の
知る所ゐ〜変ず賛せず ○三月麻布御殿初て出来
○三十二間堂深川ゐ移建立 立元集 新三十三ゐ間 若葉やきのふの葉ゐ入も木綿麻 三角
○深川海渡寺祥寺寂剣無才天を安置ゐ 寂墓紀ゐ院 隆光僧正

○仏燈ゐ〜ゐ川て本所法恩寺ゐ那人ゐ庵を建る
○十二月和人冬〜長谷川安清番員在役流の二人ゐ高ひ
御免あり

元禄十五年　壬午　八月室

二月十一日日谷滝所〜り出火青山麻布色芝浦品川ゐ焼る
ゐの時麻布御殿品川御殿妙国寺立宗清二重門焼亡 品川御殿 御再建
ゐし妙国寺の塔も 〜まとり絶し者ゐ ○二月十五日日本橋の上ゐ 傍示橋を立る
○まとり葛西飯塚村名主観世音江戸ゐ近ゐ〜り多信馨
集まる事驚し村長の家〜り愛恵の業〜て出ゐ神効あり
とて法人と名を求む 又江戸西くの寺院へも五七日ゐ参て 寂照せり山重地ゐ〜ふ那も村内の村〜
○天満宮八百年御忌 西行上人五百年忌宗祖法師二百年忌

○四月高田稲荷霊告榎の梢より霊泉をわかし眼病を愈すよしにて参詣あり 此いなりの名ハ此時の始しろ

○六月廿七日湯島霊雲寺開山浄厳和尚覚彦比丘寂 世寿六十四 近世の碩徳と称えし ○同八月廿一日歌人北村正立卒 季吟の二男なり谷中瑞林寺中玄妙院に葬

○寺島村百姓何某の娘此地の叢中より不動尊の像を得たり因て新法泉寺に納む 新田義貞殿居髻の中に籠られし守本尊ありしと異夢の告ありし也髻不動尊といふ

○貞徳翁五十年忌 霜月十五日貞徳旧の人を 草も解も花さき花のむかし哉 元角

○十二月十四日浅野家の義士四十七人本意を達す 年八人口不禄其忠義をもって　ここにいまだ

元禄十六年　癸未

二月四日浅野家四十七士自害泉岳寺へ葬す

新撰子集完録升 其余の事ハむしろ打出す 子葉源経ハ 梅一人のむ菜庵も あるべし死者の山 二句よしあし南北あり或家秘書義士の事を記せるものあり引用の書名のミ左に挙

赤城盟伝　赤城記伝　忰不記　退加録不記
新撰大石記　槿花集　赤穂忠臣記　武家形鏡記
義人録 室直清　忠士筆記 浅見安正　山科の史書　忠義碑文　易水連袂録
精不論　瑞光院記　義士考　義士伝　仙浅記
蓬窓記　淀秀記　義士文通　義士絶纓
春嵐赤穂四十六士論　鈴木忠居房　赤穂義臣伝 享保己亥 片島武矩

○二月九日儒師松田晩翠卒 浅草金蔵寺に葬 了然尼の夫なり

○小柄原日慶寺再興 ○三月麻布赤坂辺焼亡

○四月廿一日石川総中ゟ後の居梶川何某の子勝彦十二才にて深川世二万堂ハ矢数を射る 其以前より堅田年列之等争… 十一本を射る… 是以前の…

○五月廿五日大久保天神の門前吉兵衛が妻三人の男子を生む 三助 伴助

熱肝と号す三番
堂のごろとも

○十一月十日備前坂井伯元卒　号海軒酒迁
竜光寺に葬る

○十一月廿二日霄より電強く救八時地四方雷の如し大地震
戸障子ふるえ家内小船の大浪に動くが如く地二三寸ばかり揺ふるえ
て又六尺程割れ砂をふきあげ所々に水もあふれ
瓦塀壊れ家蔵潰れ完蔵塔あげ死人夥しく泣さけぶ声聞ふ
墨田川一ツ又百く壊る家ばかり失火あり八時ごろ津波ありて房総人
る多く死せり内川一ツ目の橋引汐あり八時ごろ救護地震あり
お江戸小田原にて夥しく死亡の者九二百人小田原ばかり瓦川近
き方又多人房州十万人江戸二万七千八人内廿九日火災の附焼死者
ありしものの外ばかり附深川世三間堂潰る廿日救ごろ雨
ふり始て止む年末十二月まで震ふること多くあり

西川新宅の屋敷も潰れたるとうかがひ御代の家ばかり中院通り
○十一月廿九日秋大風本所辺退ばかりおびただしく
おびただしく出風ふ家上野湯しまの天神雷門遠橋向柳原浅草町
東新田ばかり倒る町小伝町馬喰町本所横網小田町横網向院の辺深川
永代橋まで焼落ぬ五間ばかる長を世界地震火事
ばかりの○回向院一云観音像山門ふ安宅しるるる十一月霊夏の
告ありて橋上ばかりおろせ廿二日夜地震の附山門也倒るつぶれて
廿九日の大火ふ佛堂焼ばかり附ばかりを持退てつらるるしば
佛人仏ばかりのやまして集消雖集せしとて一云観音ばかりは三云形ばかり
○此火事ふ能人小枝ば家焼ばかり「焼ふ」
梅ば雷やまば一番ば焼見舞　牧童

世年間記事

元禄の頃杉山検校信都江島弁才天の霊験を得て針術の妙を
得る○雑司ヶ谷鬼子母神系譜解集せる事始る　江戸町人伊勢屋武兵衛こゝに社を再建す○白金覚林寺宗剣　覚林寺宗剣当山派鶴阪この時湯殿天満宮の下谷より白金の霊地の東へ移りこゝ後世山へ移る
○湯殿小百禦山風間寺宗剣　当山派鶴阪
○江戸麻子江戸屋敷あり武蔵国の名物大豆を左ふ
ゝ
△儒者八代洲の宅林弘文院寺常節遠橋内人見友元同玄徳林源三郎坂井伯元
同伯陵麻布竹町木下順庵淀藩田伯栄　京橋小屋敷住大伝馬町三丁目庁山
宗元　八代洲河岸住喜貞　辻春達　△神道京橋吉川惟足後廟典社官門
△俳諧　長之左衛　殖人保徳　木方沢邸　中村立長　△左筆同刑　部尺巴町畠
山牛庵谷中つやり仲　つやり祇　△弁慶牛込石常軒　京橋清水宗川　日
本橋井上一夕　市谷田町義山句碑　△連歌師　宝村昌程　同昌陸　同昌純　同玄祥
同仍春　石谷貞彩　△能楽師　本所芭蕉庵町二丁目河岸通山　石町区丁目才九
山下丁工神南小田原町　雑喉子　亟き丁目　同和伊勢丁木下幸入　同町　主角　又帝素

町少石町二丁目嵐雪　南伝馬町嘉言　伊勢町一晶　本町三丁目立志　又帝　玄蕃町　浜徳
塩沢町　林中子
△絵師　京町狩野洞雲益信　新橋　蒼町狩野養朴常信　おが町狩野永叙　立信　同丁狩
野左京附信　浜治橋狩野探信　也政　同狩野探雪　雪重　狩田氏　号町狩野左衛門昌信
狩野玄内友信　同狩野探信　本狩町二丁目狩野体円清信　同狩野内記是信　滝山寺
狩野春雪信之　同狩野一学知信　八反町狩野求信　本狩町狩野内匠英信
狩野之信
△浮世絵師　橋町菱川吉兵衛　同吉左衛門　吉山吉兵衛　石川伊左衛門　杉村治兵衛
石川流宣　名井清信　菱川鶴信　鳥居清信
△浮彫師　堀町左仙様　草屋町和泉吉兵　玄左衛門　町江戸栄左衛
彼経彫　堀町左仙様　草屋町和泉吉兵　玄左衛門　吳服町鹿屋
永宗　人形町金沢清兵　本大坂町把茶吉兵　玄宗町江戸孫兵衛　玄左衛門　吳服町鹿屋
左衛門　玄彫　彫経吉兵　同播町村山金吉兵　南鍋町大坂七市左兵
△上るり　本屋大伝馬町三丁目山本九左衛門　同所　△屋三左衛門　長谷川町松金三郎
通波町　義太夫　左衛門　同所山形屋市郎左衛門　△産婆　狩狩氏　左衛門　横山町
南八丁堀二丁目　及奥屋九左衛門　ぬりや　熱玄蕃　△おりく　成　長谷川町　廉狩氏　左衛門　横山町
三丁目　体芸　中橋きゑ　小左衛門　江戸　△けさ　狩　藝　住狩　△しゑ天狗　お水　左衛門
△大弘　解　芸田町つるや　△まんだらや　芸　協町　浅草山　城屋　△日本橋南一丁目　同　草屋町
えびすや　狩形布袋屋　同　えびすや　△米まんだら　今戸山ふりや　同　つるや　△ふいご　焼
浅草文殊院　お　えびすや　△横　脇芝田町二丁目　あめや　長左衛門　△おりくさら　苑町　藤ちゑ
△麦　麦　糸　横　浅草すし　町　柳屋　△絵　索　麦　狩　△しゑ天狗　お　△張まんだら　大伝馬町二丁目
△麦のやき　麦　町十一丁目　脇　△ところてん　芸　横車屋　△見世屋　堀町　市川屋　おが　丁きりや

△同横丁諸江町若布や車町彩揚お雲丁△京橋柴町銀座辺同横町鍋屋辺同横町鍋屋辺
△芳町辺△芳町辺同横町△食けんとん今諸山下川
沢潟や同西丁金座辺同横町△おさげ不せんべいや八丁堀夜店
清兵衛つそのかわらしさまし繁市まいの類す
○前に載る菱川の浮世絵ハ古代
の浮世絵師にて元禄寛永の比行きさう
○此時代俳諧冠り付始り世に行る○筝曲岩崎検校考揚勾当
安藤川流行る花都といふ府比小唄三味線の上手
○つ藤ゝ飛の朝素松者の先一名 あとにふ小唄流行 投節小うた
こゝ方ちりとかりおり○幇間髭の無体といひしも此比なり
○一節切の笛中古より廃ふ行き此時代なる炭絵美ひさう
○世事流行揚弓いみやこ二中此道を得さう一表二百本矢ゝ比
的中古さうといふ元禄の比芝ふ五郎未頑といふ人のものまね

上手なり百八拾匹ほの矢員江戸中結改協の看板を記し無双の
上手といふ比年八百八拾匹ほハ常の事ふして百九拾匹或ハ七八ふ
なるかたゝくの程ふ世人うくハ上手なり下略 こゝふ一件とのつゝら
一中といふ貞享中江戸にて波宝與白揚弓射後蓬矢拙の比解へ退考を著せり
上手なり俗の称なる一中のるふかゝ比比ちう比乃廃りふ行き賞更の比ふいうても
結改協十二ヶ所を再行更廉子大金丹
或さう今ハこの態かゝく廃さうとかゝる
○葛飾二平二所ち院観世音明暦元禄中浅清とふ海門寺
記ふく滅亡比○澤ゝ恵慣子紫帽子の左ちふ
沼のかりを分る行ちる
○小左衛門の子深川流行○山東菊の流ふ手菊ふ青を廃る事
元禄の末の比ふ止宝永の比とう覗蓋ふ廃る事ふ流しまるへと
いふり○吉原の遊女八朔ふ白無垢を着る事元禄中江戸町
壱丁目巴屋源右衛門抱へる揚といふる支その比踊をうゝ比

居けるゝ別業の宿なりし附属居るゝ自むくの侍ふして揚屋へ
しける客の艶なりしとそ昔は花街大金ふりて
を云る事ふまりしゆ
是迄のこともうく武家の例ふるゆとそ
八朔ふ白き衣裳を着しるゝ尚て考
○寛八町堀三丁目仮紀伊屋文左衛門 材木商ふして世ふ聞ふ紀文大尽と俗号す 霊巌寺門仮
寺ふ良義大尽なり 此人元禄中傾ふ大分限なりし
人の子孫く花街雑劇ふ遊ひ稼くの婦こをもし巨万の家を費
しける事諸人の知る所ふして贅せし
○江戸真砂六十帖 元禄中の作ふ紀人坊元とする書町ふ仮住て今ふ
揚屋町へ引移るこ徳り ○云家業語ふいふ武江素志ふ
伊国小左衛門 小山判官を殺しこる仮と云伝へふ素志稿前の揚

社ふ小山判官ゝ霊祠あり又素志の坂下湯井小平次義秀捜
寺及廣安境の西ふ小山判官ゝ塚ふ刻り井義秀ゝ元禄
の仮まてありしゝ崩れて今ふなくなり伝へこと云く
○元禄中の豪家神田佐久間町ふ住せし尾張屋清三郎といふの
唐仏の釈迦の立像を得て牛込弘福寺へ寄付し牛込ゝ仮ふ
有りて今ふ至る玉院へ安置仮尾張代々の墓ふ玉院ふ在
彼支婦の像もありとそ ○元禄中江戸名所図会撰出る事
○元禄六年温清彫の江戸絵図ふ亜二丁目三丁目の左右ゝ所
の沼地南北ゝ町左右ゝ所沼地あり其彫揚ふ仮揚と記り其
揚ハ矣の内義の南ゝ一ゝ目揚の陰ゝ深してあり（まつの天和元年の作ふ記せり 水
乃揚ハ吉祥寺揚とあり今の昌平橋ゝ在せ揚しあり（此揚同寺ゝ上野池あり）

村雲町と称す遠近の内（近門の隣なれど遠者町の四地の例）なありて奇石と記せり（村松町八幡係の誤ふも）
（高二尺余）黄の石あり（高二尺余）
のおくに小網町三丁目の北の橋を右に記せり今の山下口を亦
ひがしとあり（日十三年の頃ふ鴻池橋とあり　又武門を黄人張武門とかり）上野清水観音堂八今の擂鉢
山と唱へる所の山ふあり　大塚護国寺の門前茗田園あり
○三圍稲荷社内ふ一丈の狐あり例の通店ふ焼えて年経のの童子ふと化するとき
ふ稲荷や狐よひおに姫うりと　子角
ほうきふ狐うちをあらうもの

宝永元年　甲申　二月晦日改元

二月廿七日地震江戸まて変〻震ふ
○夜盗橋と新大橋の辺ふ道を分くる　去年の大火ふ夜盗橋
人多く死せるゆへなり
○三月年号改元あり〻禅吟
宝永の絵ふ
宝永の絵ふ　冠室ス

○五月三日本因流免許元祖本因親伝率（小月向本流ふ
ふ養ス）
○六月十五日より七月朔日二百江戸を辺大雨大川筋ふ水ふ八月
廿日より山ふ水あて下総猪ら股ふ多押〻崩〻田畑ふ家ふ二軒破壊
して死亡人数を知らず本所深川流れ山谷下谷辺屋宇ふ浸ス
○六月廿三日小塚改出入率（幸兵衛二男称十左衛門家乃家
書をよくせり　年六十六之）
○七月廿五日より九月朔日まて護国寺ふ於て土作出五大山文殊
養護開帳あり○八月能人三昇立志率（ロ十八才二世
の立志あり）
○九月神田明神社御遷宮あり
○十一月霊雲寺再建成廿九日遷座
○今年お家騒動ふ於て幾世隆の見世を
お一名為とあり〻世本後年〻いろり

同　二　年　乙酉　ロ月至

三月より回向院にて播州吳服の茶所如来開帳

○同月より護国寺にて播州大沢山久安寺観世音一寸の尊
月開帳○同月より永代寺にて信州善光寺如来開帳○五月浅草川に流あり
観世音菩薩紀州熊野山西勅開帳
○六月十五日山村座吟翁家羽衣　八十二才沈のたくに芸なる五義を石塔に流さるる
沈の舟あり孫世ふれあり沈「花も見所郭」
をもまちぬ世
後の世ふるまき
○七月より回向院にて浅草霊山歯阿弥陀如来開帳
○同寺新法恵にて京本願寺釈迦如来開帳
○同寺永代にて江戸日蓮宗開帳
○今年伊勢宗鹿諸国より流行多し　信濃おらげ多しとなり和漢会図
俗の素人多の歌の文を畧して
冥同月上旬の頃浅草中洲の童男童女七八才より十四五才なるあり貧富を論ぜず
多りをなすなる弱し発渡寧楽八坊いまだ家内一所のひとまとまりて法人
和せるごとく妻子従僕生ものいふ毎を与ふ家をおく流行を保抱後八幡還東
ふして殺を与へき地もあり元来流行の男女一日に二三万人或六七万人とかり時に

浅草寺境内の旅籠屋を設ひ多く或い茶屋或い布施の小貸座敷伊茂登を
設ひ五条二条の橋詰に掛茶屋の男女ふるあるのくあり沈江戸猪牙の徴を
被恐の紙をおさまる又伊勢講の形くるあり分量き流人の形容乃宿場を設る
又秋七八月ふるまい法恵を恵をとりの茶流勝て計つくる沈京師ふ別て祇園を
いるのかくる沈武蔵十里の西を二三日ふ沈還せり沈あり或ハ死せりのと茶りし
復を人つらなく沈りし話あり又ハ変ふハ稼の右麻茶隊しりとふハ保抱まで隊
し大夏を変るまで義亜しふ忽大麻と変せしあとのひのしる氏時のさまを要く
紀して寛永千載紀と題せる茶紙あるとちん又年長大人の玉勝るふもんえとり
寄りしの云日蓮宗本那寺門流ふるとかいひもあし沈しふ
見ハ聖を沈しめ懸矣ふ迷ハさるふあるふあくまて己ら家ふまるひて家雅とり
くもこれあし沈わくまて己ら家ふまるひて家雅とり
ま沈るべきあやえくこの沈の和合　侍代なれや古情沈りの年どこの都ふもあそくひ
らあ
る

○七月廿六日官医武田春徳卒　長寿院と号沈所
東海寺中小林院ふ葬
○十一月日歌実朝とり京吳猿楽源義経の男女吳猿楽源義経の男女南小六町東西
三町計り流行あ方八ケ所焼矢翌五日巳上刻火消る
○十二月末山岩光寺年とり移る　今も岩井ふ岩光寺板
といあり是四地あり

寶永三年　丙戌

正月二日　伯耆守（ほうきのかみ）源朝臣（げんのあそん）綱吉（つなよし）薨（こう）　名希翔号常源称小右衛門　鍛冶橋田屋敷にて葬る

○正月十日　秋元但馬守（あきもとたじまのかみ）別邸田町（たまち）より出火して筋違見附土手町

左衛門町（さえもんちょう）より本町（ほんちょう）石町（こくちょう）通り小伝馬町（こでんまちょう）油町（あぶらまち）大門通り長谷川町（はせがわちょう）和

泉町（いずみちょう）安藤町（あんどうちょう）辺より大坂町（おおさかちょう）材木町（ざいもくちょう）を通りて堀江十五日

辰刻鎮る○正月十八日　回向院（えこういん）にて御書（ごしょ）三箱（みはこ）の事（こと）大火（たいか）に焼（やき）

せし紫五十年忌（しごじゅうねんき）法事（ほうじ）あり○二月廿日夜亥刻（よるいのとき）南鞘町（なんさやまち）より

京橋（きょうばし）南小田町（みなみこたまち）二町（にちょう）焼亡（しょうぼう）せり

○四月十四日　梨子（なし）の本義瞞（もとぎまん）　戸田氏茂睡（とだしもすい）号茂睡（もすい）狂歌（きょうか）清家（せいか）令（れい）を受（うけ）て

茨城（いばらき）雅世（まさよ）　号（ごう）を称（しょう）されたる人（ひと）紀

命のまことを　なつかしがりて

○六月元字今改（げんじいまあらため）あり是（これ）を宝字（ほうじ）と云（いう）

○七月より根津権現社（ねづごんげんしゃ）の西（にし）の方（かた）再興十二月成就（さいこうじゅうにがつじょうじゅ）　舞地八分

の国（くに）の坂（さか）の所（ところ）あり○七月廿二日大雨（おおあめ）数日（すうじつ）降（ふ）る

○八月狩野松林悳（かのうしょうりんとく）伝図（でんず）の極彩金（ごくさいきん）の八幡宮（はちまんぐう）に掲（かか）る

○九月十五日亥刻（よるいのとき）大地震（だいじしん）○十二月九日医師（いし）荻生方菴（おぎうほうあん）卒（そつ）　名（なは）

の父（ちち）三田（みた）出（で）なる人（ひと）茶（ちゃ）　○屋形（やかた）船百艘（ふねひゃくそう）を拵（こしらえ）る　土名用江戸船子（どめいようえどふなこ）拾（じゅう）人（にん）ばかり

○十一月十六日巳刻（みのとき）江谷作町（えやつくりまち）より出火（しゅつか）し丁半（ちょうはん）焼（やき）

○同月廿日夜子刻（どうげつはつかよるねのとき）和泉町（いずみちょう）後（うしろ）より出火（しゅつか）し大坂町（おおさかまち）伝右衛門町（でんえもんまち）堺

町（さかいまち）尊屋町（そんやまち）安藤坂（あんどうざか）居楽町（いらくまち）長谷川町（はせがわまち）武家方（ぶけかた）土幅二町（どはばにちょう）長十

五町計り焼亡（ごちょうばかりしょうぼう）

同巳年　丁亥

正月（しょうがつ）芝増上寺（しばぞうじょうじ）惣地（そうち）墨絵天井（すみえてんじょう）再建（さいけん）あり○増上寺（ぞうじょうじ）

施餓の白あり○正月十五日中中村溪町村同心町より出火牛所一の
橋丸木より出火あり中の口業平天神の社を元小梅小名宮新田
○二月晦日御人損牛を角牛　年七才　号宝晋丞
二年板上行ち小藤也
○三月八日大火あり○中正保弱小紀り　手伝小　未詳　○伊達朝熊山虚空
蔵井四向院出て宗旨○　五月廿二日本郷山勧学院乃翁信新寂
○七月二日下谷雲福寺住持傍養法印寂　五位の貝小さい田来こり
甲斐流星学小名有一人之
○八月朔日小石川高窪橋辺より出火幅四町巾三丁町程焼也
○九月日蓮谷安楽寺牛　後年伝法寺墓あり碑の右小実相寺の門を
墨〜〜〜〜れ　月八度　一中日頼　もっぱら世のやみの果を示し
○十月十三日御人服部嵐雪寂牛　九十四才久敬狂歌立市
月菊至右京寺小藤
○十一月十六日連寺師匠村昌陸寂　六十九才

○諸国銀札古停止あり
○十一月廿日より富士山の根ゴ須走より出焼る天晴く雷声地震
鳴〜〜く冥土同様暗夜のごとく小成灯焼桃灯をともせ廿二日弥小もしく
あり白晝晴夜のごとく小成灯焼桃灯をともせ廿二日弥小もしく
廿四日小成り天晴き候日を除て法人安楽寺又廿四日廿六日
再び天雷より砂降り雷声の如き雷鳴地震あり昼より暗夜
廿八日牛常の如し此時富士山の山を宝永山と云世人沢山噴噴
を焼る　いま初焼宗小日本元年より此前富士山焼る例の延暦十九年三月廿四日より
月十八日と今年の如く焼貞観元年五月十日白焼ると云
○十一月廿八日法人寺寧寺牛　三田小山　大牛ち小藤
宝永五年　戊子　正月宝
正月元日大雨○宝正月二日武蔵相模三河国地震

○二月地上に白毛を生ず ○三月秋元侯の臣岩田彦助といふ人武州入間郡堀兼村堀兼井の旧蹟久しく廃せんことを歎き石標を立傍に碑を建る ○四月朔日茶人山田宗徧卒 八十五才 名周学 東本願寺地中長徳寺に葬す 其子二人有 山田久兵衛宗屋 宇治弥兵衛宗俊と云 ○同月俳人芳賀一晶卒 一書に宝永三年とも云

○五月十文銭をはじめて通用始る 表に宝永通宝 裏の縁に永久世用とあり 径一寸二分 重一匁 文字は小田原侯の臣にて林家(?)の門人[illegible]といふ ○深川の沙門 世に地蔵坊といふ 正元 金銅丈六の地蔵尊六躰を造立して今年より始て江戸六所に安す 南品川品川寺 今年九月成 山谷東禅寺 宝永七寅八月成 四谷太宗寺 正徳二辰九月成 巣鴨真性寺 正徳四午九月成 深川霊巌寺 享保二酉四月成 同所永代寺 享保五子七月成 ○冬より麻疹流行 ○十月廿四日算術の師関新助孝和卒 号自由亭 関流祖也 牛込浄輪寺に葬 ○雑司谷鬼子母神開帳

○十一月十五日深川八幡宮造営遷宮 ○十二月二日狩野随川岑信卒す 四十七才 ○十二月廿二日後藤十代廉乗卒 八十二才 ○十二月谷中感応寺 今の天王寺 の隠居なる空無上人宝永尚歯会あり 洪州渡辺幸庵百廿七才にて上座にあり 拵子(?)によるもの(?)の僧二人俗人素襖(?)にて其座まで 長崎(?)表春秋(?)家下[illegible]日月生 此語(?)にて席の者不審ありし是上席の者の古実あるらし 幸庵は本は摂州生にて駿河大納言(?)天正十年壬午年に生る 仕官の比は[illegible]の勤切あり 仕を辞して後便船して唐土へ(?)わたり天竺阿蘭陀をも(?)経て[illegible]の法(?)を学びたり 九十九才の時帰朝し宝永八年卒 同所に云幸庵老人の説には人八十まで其の也(?)とて其く[illegible]年上方にて八十才まで出ることの八十の人と書て来ありといへり

宝永六年 己丑

正月十文銭通用止 ○去年十月廿日の後雨降らずして正月十一日夜に至りて雨降る 物嫌共(?)みのくり(?) ○三月諸国(?)酒運上御免

○四月二日より七月二日まで深川八幡宮開帳

○六月宝字銀通用ちゝまる

○七月より九月まで圓向院にて法華宗法苑院法華会初る寛帳

○九月多賀朝湖（ちょうこ）俳句をもさる浪華一瀾（なみ）と号す　深川長寿町平住也

○十二月廿日日能人小澤源八（幸）　幸松町坊正なり　後年墨を絵ちゝ木華也

○浜辺幸庵対話記後　杉本義藤編写本

宝永七年　庚寅　八月閏

二月上野清水（しみず）稲荷の社殿草葺形へ移る

○三月二ツ宝銀法度改　○高騰大米石石値を禁せらるゝ法なる札場定る○湯女四法寺寛剣岡山本食義寺上人寄（寄像三体六月七日迄化九十五才なり）○書圓向院にて稲毛（いなげ）世尊作如来寛帳

○三月十九日角田川本母寺橋ゝ九七百世二年忌大念佛圓向

撞ゝ小鐘紀本湾ゝ貞元元年ゝゝ七百世又年ふあゝまゝ○三月ゝより五月ふゝまて永代ゝふ於て奥州

岩城愛眼の法施茅形朝ゝ持ゝ後実の親世ゝ又ゝ慶の不動ゝ

開帳○三月ゝより五月まて深川ゝ行寺にて荒包（ちつつみ）の阿法施ゝ及び

牛波仲ゝ軍陣のゝ法ゝ多願世ゝ二月月不動ゝ結ゝ弁才

天寛帳○四月乾金寛三ツ宝銀通用始り銀米判通用止

○七月十一日飛騨ゝ剣立の松雲禅師寂　六十二才

○七月ゝより宝八月まて市谷八幡宮境内ゝ於て浅草豊法輪ゝ虚

空蔵寛帳○九月廿一日芝日出門徳院ゝ法人渡来

日法石一丁目ゝより二丁目まて芝口二丁目二丁目三丁目と改る

○十月十日夜刻池上本門ゝ焼亡　一本ゝ十二月

○十一月琉球人来聘　正後英里子　見城直子　○武隨等ゝ今年ゝ出ゝ

大火ありしとぞ。○十一月青山梅窓院の鳶瓦を鑄潤ん
とせし時伯持法蓮社本芳蓋鏡的上人の愛子於女来り家畜
ふして佛果を得たり。後て一面の鏡を拵へ来たり那くの色を
加へて鏡を鑄かへ解説を乞るの因縁ともあるべしと云ふと思
へど愛覚て後例は一面の鏡あり上人亨奚の忌ひをなすこの
鏡ふかへらを鑄改しむるなり
○十二月十九日来る別祢田小柳町つぎ真田家中屋敷より
出火北風烈しく本町五町八丁堀霊巌海を焼る長二十
五町幅二町ばかり七八町ばかり翌日屋別結る
○寛中七面坂七面大明神勧請 菊と云る女出て家命の坂
愛の告ありてなる所なり

廿年間記事

寛永中霊夢ありて南部侯の門内に立て石像の閻魔王江戸
金地院境内に移せり
○寛永中疫病大に流行しに泊辺の百姓共小麦の粉の麦芽米の粉を
作り弱辺寒士の市に賣るる求ありしかの疫癘の患をのがれ
たり後寒士糸屋の方相と云ふ世時代辺辺の童子繋を放て
遊けることを○塵塚谷に蘆摩芋の本日本に寛永元年来る
あり薄荷ありて特産なり本長崎にやどりて稀なり享保
廿年乙卯小石川薬草園に載せられ元文に弘まるとぞ記り
寛政年間薬草園考をあらためたり
○鼻紙袋この時世とり始る
○寛永中京都に清水云実法云実東山下向の時寛永を
部して月と花とに初る人に見せたり寛永の雲の法りを

○寛永元年板遠辺乃市の江戸名木名所揃今の所々うりて
有橋本の南側矢の出彦源町屋と成渡世する其の高羽町家此
軒を並ふ 慶戸時代満天満宮をうり来の方ふ隅りてあり

武江年表巻之三 畢